

佐佐木幸綱監修「心の花」編集部著『知識ゼロからの短歌入門』

小林賢太

ベテランの方もぜひ

短歌初心者にとって嬉しい一冊が出版された。書名に「知識ゼロからの」とある通り、本書は歌の歴史や俳句との違い、文字の数え方など、基礎から丁寧に短歌の世界を案内してくれる。

基礎知識とはいえ、侮ることはできない。例えば一八ページ「句切れ」。私はこれまで中高生や大学生に古典和歌を教えたことが、彼らの多くは和歌を575/77と切って考えがちである。確かにその方が音の響きは心地よいのだが、意味を理解したい時に機械的に上の句/下の句で切って考えてしまうと、分かりにくくなることもある。句切れは歌を読む（詠む）際の基本だが、とても重要なポイントである。ほかにも口語と文語、仮名遣い、比喩、会話体、助動詞などの基礎知識を、語り口調で分か

りやすく解説してくれる。

詠歌初心者の私にとってはどれも有益な情報だったが、ある程度ベテランの方が読んでも有意義だと思われる。自然に使っているテクニクでも、文章化された解説を読むことで、その効果や方法を論理的に把握でき、誰かに教える際に役立つだろう。その意味では、国語の先生方にもお勧めしたい一冊である。詩歌の扱いが苦手な国語教員は少なくない（私も含めて……）。

創作に関する知識だけでなく、結社や歌会、歌集出版の流れなど、短歌を続けていくうちに、誰かに聞きたくなるような疑問も解消してくれる。以前、ある学生に結社の話をしたら、「ケツシャヤ？ 秘密のやつですか？」と言われたことがある。それは秘密結社だ。本書を読ませてあげたい。「祭」「職業」などテーマごとの歌がまとめられた「作品から学ぶ」のページや、「研究者の歌」「海外を詠うということ」などについて書かれた「短歌こぼれ話」のページも大変興味深く読んだ。至るところに実例として、短歌がふんだんに掲載されてい

るのも嬉しい。短歌のアンソロジーとしても楽しめる一冊である。

私のお気に入りのひとつは、「推敲する、推敲を重ねる」の最後だ。「声に出して読む」「語順を入れ替える」などの方法が具体例とともに記された後、「推敲法番外編」の最後にこうある。

「諦める」

思わず笑ってしまった。が、本文は次のように続く。「頑張つて推敲しても満足のいく短歌にならないときもあります。そのときはきっぱり諦めてしましましょう。とはいえ、一度は完成した短歌。捨てるのは惜しいです。「未完成ノート」なるものを作つて保管しておきます。あなたがレベルアップしたときに、見違えるような作品に生まれ変わるかもしれません」

なるほど、と思った。同じ人が同じものを見て、その人の内面に変化があれば見え方は変わってくる。それは短歌にも当てはまる。未完成ノートに蓄積されていく歌たちは、未来の自分への試金石でもある。私の手元にも、どうにも上手くまとまらず、ほったらかしたままの歌稿が少々ある。早めに良い歌にしてあげたいものだ。